

# エコー型聞き返しに関する考察 —発話機能と発話末拍の上昇調の関係を中心に—

梅木俊輔

東北大学大学院文学研究科言語科学専攻

日本語教育学専攻分野博士後期課程 1 年

umeki0824@hotmail.com

## 1. 研究の目的

普段の会話では「え？」や「何？」など、会話相手に聞き返すことがある。こういった会話相手の発話が聞き取れなかったり、聞き取れたもののその発話の意味が分からなかった場合に使用される聞き返しについては、尾崎（1993）以来、「問題処理の方策」（尾崎，1993，p. 21.）として日本語教育でも取り上げられてきた。しかし聞き返しにおいて、「問題処理を目的としない聞き返し」<sup>1</sup>の側面についてはほとんど取り上げられてきていない。

本研究は日本語母語話者の雑談に見られるエコー型聞き返しを中心に、「問題処理を目的としない聞き返し」の実態を把握することを目的とする。エコー型聞き返しとは南（1985）による問い返しの定義に基づく、「当該発話以前にある相手発話の一部あるいは全部を上昇調で繰り返す発話」を指す。

まずインターアクションの社会言語学（以下、IS）の分析枠組みに基づき、エコー型聞き返しの発話機能を明らかにする。次に各聞き返しを理解する上で一つの重要な要素となる発話末拍の上昇調と発話機能との関係について考察する。

## 2. 研究方法

### 2.1 データ

①会話の録音：2009年7月～8月。②被験者：日本人大学生20代の男女10名（男性4名、女性6名に親しい人との雑談を録音するよう依頼）。③合計録音時間：約8時間。

### 2.2 分析の枠組み

ISは言語人類学者 John J. Gumperz（1982）により開発された会話の分析方法の一つである。ISによる分析において、言語使用に伴うある現象は会話状況に生じた結果であり、その結果が相互行為によって、そのつど達成されていくプロセスを明らかにしていこうとする点に分析の特徴がある。

## 3. 分析と考察

### 3.1 発話機能の分析

表 3.1

発話機能（総数：76）	発話処理段階
a. 聞き取れない・字義的意味が分からない（35）	相手発話の復元に関わる段階
b. 驚き（13）、c. 不審・不満（9）	相手発話の受け入れ判断に関わる段階
d. 面白がり（14）、e. 時間稼ぎ（3）、 f. 進行の催促（2）	相手発話の受け入れ判断に関わらない段階

表 3.1 右側の発話処理段階とは聞き返しの発話者が相手発話に対しどのような処理を行っている段階にあるかを示す。この発話処理段階を基準に聞き返しは概ね3つの段階に生じるものに分かれる。括弧内の数字は今回収集したデータ全体から得られた各発話機能の例数である。

### 3.1.1 驚きの表示

data 1 ではバレーボール部に所属する二人が顧問の先生に恒例の挨拶に行くことについて話している。挨拶に行った際に食事することに関して、A に同意を求められた B は聞き返している。続いて B には A による「↑えっそうなんじゃない？分かんない」の後、0040B において「↑あ：そうだ [～さん]」と過去に参加した経験がある人についての思い出しの表示が見られる。この表示から B が聞き返しを行った時点では、相手の発話を示すような想定をまだ持っていなかったことが分かる。ここから 0038B 「>↑食べるの？<」と聞き返しが生じているのは、その直前の発話内容（お昼を食べる）の受け入れに対する判断において、そのまま受け入れられなかったこと（＝驚き）を示していると思わせる。なお、ここで生じている聞き返しは、その音声的特徴として、発話末拍の上昇調が急激に上昇しており<sup>2</sup>、声の大きさも局所的に大きくなっている。

data 1

0037A	でもなんかお昼食べるんだよね
→0038B	>↑食べるの？<
0039A	↑えっそうなんじゃない？分かんない
0040B	↑あ：そうだ [～さん]
0041A	[なんか] 言ってたよね＝

### 3.1.2 不審・不満の表示

data 2 の 0891A の聞き返しに至る下りでは、B が最近考えたという新しいテーマパークの名前について、A はその名前が既に他で使用されていることを述べる。それに対し B は A の指摘への具体的な応答を行わず、ただ 0890B 「いや」と述べるのみで、「なんじゃワールドですね」と押し切る。A による聞き返しが生じるのは、この B が押し切ろうとしている発話の直後である。この下りを見る限り、A が B による直前の発話をそのまま受け入れているとは考えにくい。よってここでみられる聞き返しは復元された相手発話について、その受け入れを問題にしていると見なしうる。しかし data 1 と比較した場合異なる点として、発話末拍の上昇調は緩やかな上昇調と

なっていること、また data 2 には、0885A 「それ (.) パクってるよね? h h h」、0887A 「h h h あったよね? なんか:」、0889A 「[なんじゃタウン] みたいななかったつけ:」といったように、相手発話の受け入れに抵抗する表示が見られること、があげられる。つまり、data 2 の聞き返しは data 1 のように単に相手発話を受け入れられなかったことを示すというより、受け入れることに対する抵抗を示している (=不審・不満) ものと考えられる<sup>3)</sup>。

data 2

0884B h h なんじゃワールド (.) っていうのを  
 0885A それ (.) パクってるよね? h h h  
 0886B いや  
 0887A h h h あったよね? なんか:  
 0888B [なんじゃワールド]  
 0889A [なんじゃタウン] みたいななかったつけ:  
 0890B いや (.) なんじゃワールドですね  
 →0891A え: なんじゃワールド?

### 3.1.3 時間稼ぎの表示

data 3 のように相手発話に関連した内容の検討を要する場合、検討のための時間を作り出す必要がある。そのような際に、相手発話に関する内容の検討を行っていることを示すために行う聞き返しがある。このような聞き返しが生じる際にはしばしば、data 3 に見られるように、「え: っとね:」や「そうだね:」といった言い淀みや、同様の発話の繰り返しが見られる。このような検討中の表示がある場合、それを助け舟を求める合図と見なして相手側がターンを取ることもあるが、data 3 のように相手側がターンを取らなければ、検討中であった話者が検討後の表示となるターンを取る。

data 3

0161B 最近明るい話題か: なんかありますか最近明るい話題って  
 →0162A 明るい話題? (.) 明るい話題ね: そうだね: 明るい話題 (.) (.) え: っとね:  
 (.) (.) 明るい話題? h そうだね: 何もお届けできないかな:

### 3.1.4 面白がりの表示

data 4 で B は自分が発明したという火バサミが特殊であることを 1344B 「ボックスがついてんのよね」と説明する際、「ボ」に力みを加えて際立たせている。それに対し、A は 1345A 「h h h h h ボックスがついてんの?」と笑いながら B による際立たせを模倣し、聞き返している。data 4 の聞き返しは一方の発話に生じる際立たせに対する他方の面白がりの表示として、表示の仕方における隣接ペアの第二発話部を形成していると思なすことができる。ただし聞き返す側がいつ

でもどこでも相手発話を模倣して聞き返すだけでは隣接ペアを形成するわけではない。際立たせ・面白がりの対を形勢するためには、聞き返しが拾うこととなる対象が必要となる。

data 4

1342B	片っぽのハサミの方に
1343A	うん
1344B	ボックスがついてんのよね
→1345A	h h h h h <u>ボックスがついてんの？</u>

### 3.2 考察：発話機能と発話末拍の上昇調の関係

各発話機能と発話末拍の上昇調の相違に関する考察から示唆される点：

- i. 急激や緩やかなど、上昇調の相違は相手発話の受け入れが不可と判断される際の確信の強さに関わりがある。
  - ・受け入れ不可とするのにそれほど強い確信がない場合→急激な上昇調（驚き）
  - ・受け入れ不可とするのに強い確信がある場合→緩やかな上昇調（不審・不満）
- ii. 急激でも緩やかでもない無標の上昇調は相手発話の復元に関わる聞き返しと結びつく。

### 4. まとめと今後の課題

エコー型聞き返しの発話機能は「問題処理を目的とした聞き返し」以外に様々なものがある。それは発話者の相手発話の処理段階が異なることによる。今後の課題として発話処理段階と韻律の関係について詳細を明らかにしていきたい。

#### 注

- 1) 本研究では会話相手の発話聞き取れなかったり、聞き取れたもののその発話の意味が分からなかった場合に使用される聞き返しを「問題処理を目的とした聞き返し」とし、そうでない場合に使用されるものを「問題処理を目的としない聞き返し」として区別している。
- 2) 日本語音声のバラ言語情報の「多くは、発話の冒頭や末尾において局所的に顕在化している」(前川・北川, 2002, p. 15.)と述べられている。
- 3) Nick (1997)でも「躊躇やためらいがある発話には音韻時間長の長い音素が出現する傾向があると考えられる」(Nick, 1997, p. 69.)と述べられている。

#### 参考文献

- Gumperz, J. J. (1982) *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 串田・定延・伝(編)(2008)『シリーズ文と発話2 「単位」としての文と発話』, ひつじ書房.
- 前川喜久雄・北川智利(2002)「音声はバラ言語情報をいかに伝えるか」『認知科学』9(1), pp. 46-66.
- Nick Cambell (1997)「プラグマティック・イントネーション」『文法と音声』, くろしお出版, pp. 55-74.
- 尾崎明人(1993)「接触場面の訂正ストラテジー—「聞き返し」の発話交換をめぐって—」『日本語教育』81, pp. 19-29.